
ずっと好きだった

さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと好きだった

【Nコード】

N60230

【作者名】

さくら

【あらすじ】

小さな会社のOL、三浦直美、28歳にして干物女です。男性と何年も仕事以外で会話すらしたことがありませんでした。それがある日、ふとしたきっかけで男性とお茶をすることになりました。その結末は…。

（前書き）

はじめまして。読む専門の私が調子に乗ってまた書いてしまいました。以前書いたものに一部追加しています。よろしければお楽しみ下さい。

「ふぁ…」

眠いなあ、早く終わらないかな。

いけない、いけない。ちゃんと聞いてなきや後で困るわ。

私は三浦直美 28歳、小さな会社に勤めるOLです。趣味は韓国ドラマを見ることです。どっちかというと家でゴロゴロするのが好きないわゆる干物女です。

その私がなぜここにいるかというと、会社のお局さまに付き合っついていや付き合わされて時々休みの日にボランティアをしているのですが、そのお局さまが行くはずだった赤十字の救命講習会に都合が悪くなったからといって代わりに出席させられているのです。

せつかくの休みが潰れました。

最悪、でも怖いしな…

「では昼食の時間になりました。13時になったら実技にはいります。」指導員がお昼休みを告げました。

ヤッター！お昼ごはんだと思い、ふと視線を感じて後ろを振り向くとスーツを着た30代前半と思えるちょっとカッコイイ男性が目にとまりました。

不覚にもドキッとしてしまいました。

なぜから直美はここ何年も恋愛どころか仕事以外で男性と口を聞いたことがないのです。

口を聞くとしたら、

韓国ドラマにはまっているのでレンタルビデオショップの店員と

「返却予定日はいつにされますか？」

「1週間でお願いします」

ぐらいなものです。

20代の女性がこれでは悲しすぎます。

しかし、直美は気にもしていません。

「おい、ごはん食べに行こうぜ。」

その男性に向かって別の男性が声をかけました。

「いま行くよ。」

ちよつと名残惜しそうにその男性は答え、二人で昼食を食べに行つたようでした。

私はまわりを見渡すと何人か妙齡の女性たちがいました。そうか、この中のどの人かに声をかけたかったんだなとがっかりしたような、納得したような気持ちでした。

私はというとお昼どうしようかなとたたずんでいたら、近くにいた年配の女性が気の毒に思ったのか、どうかわりませんが声をかけてきました。

「ねえ、ちよつと、もしかしてあんたも一人で来たの？私も一人で来たのよ。おばさんで悪いけど、お昼一緒に食べない？」人なつっこそうな笑みを浮かべました。

直美はえっと思いましたか、まあ、一人で寂しく食べるよりはいいかと思ひ、

「ええ、一人出来たんですよ。」

「そうじゃないかと思ったんだよ。ご飯は一人で食べるより何人か

で食べた方が美味しいからね。」

「えっと、じゃあ、どこで食べます?」

戸惑いがちに直美は尋ねました。

「そうだね、このへんの近くにファミレスっていうかね、そこに行ってみるかい?」

「いいですね。そこへ行きましょう」

こうして直美はその年配の女性と食事に行きました。そして、昼食が終わり、実技が始まりました。

指導員が

「さあ、近くにいる人とペアになって下さい。人形を使って人工呼吸の実技をしましょう。」
と呼びかけました。

直美はどうしよう、知ってる人もいないしなと思ったとき、また、あの男性と目が合いました。

直美はなんだか恥ずかしくなつてふつと目を逸らしたとき、お昼ご飯と一緒に食べた年配の女性が話しかけてきました。

「ねえ、私とペアにならないかい?」

直美と一緒に食事をして少し親近感を感じていた人で、ペアの相手をどうしようかと思っていたので助かったと思って、

「ええ、ペアになりましょう。相手がいなくて困ってたんですよ。」

と答えて、その年配の女性とペアで実技をすることになりました。

不器用な私は苦勞しながら、

人工呼吸やAEDを一生懸命にやっていました。

そして、ふと視線を感じて振り向くとなんとあのスーツの男性が私のすぐ隣にいるではありませんか。

私はドキドキして、動揺のあまり口をパクパクさせてしまいました。するとその男性は、

「ずいぶん熱心にされていますね」

と笑みを浮かべながら声をかけてきました。

免疫のない私は、

「不器用なものですから。」

とひきつった笑みで答えました。

あの男性が何か答えようとした時、指導員の実技指導が入り、会話はそこで終わりました。

そして時間になり、講習会は終わりました。

直美は、

やっと終わった〜！もう夕方かあ、ちよつとお腹すいたから家に帰る途中でケーキでも買って帰ろうと思いつながら建物を出ました。

そしたら、なんとあの男性が建物の前にいたのです。

「あの…、」

と恥ずかしそうに話しかけてきました。

誰かを待っているのかなと思った直美は

「お疲れさまです。まだ何人かいらっしやいましたよ」と答え、帰ろうとしたとき、その男性は

「いえ、あの、その…、お茶でも飲みませんか？」
と言うではありませんか。

免疫のない直美はその男性の視線に堪えられなくて

「はい。私でよければ…」
思わずうなづいてしまいました。

その男性は嬉しそうに、
「あ、じゃあ、近くにコーヒーショップがあるみたいだから、そこに行きましようか？」
と直美に言い、ふたりでお茶をすることになりました。

男性は嬉しそうでしたが、直美ひそかに
成り行きとはいえ、男性とお茶なんてなあ…。気が重いなあとひそかにため息をつきました。

その男性の案内で、一緒にコーヒーショップに入りました。
そのコーヒーストップはビルの中にあり、なかなか落ち着いた雰囲気のお店でした。そのせいか、週末だというのにお客はちらほらといるだけでした。

しかし、ゆつくりと話しをするにはいいところのようでした。
二人は店内の奥の席に座りました。

席に座ると、男性が

「僕、営業してるから、仕事でよく使うところなんだ。」
と話しかけてきました。

直美は、

まあ、そういう感じのどこみいだねと思って、

「あ、そうなんですネ」

と直美は興味なさげに返事をしました。

その直美の態度に男性は構わず名刺をだしてきました。

「はじめまして、鈴木智史と言います。」

その名刺を見ると、その男性は直美の勤める会社の取引先の人でした。

直美は

なんだ、取引先の人だったんだと思って、ふっと安心して、

「私は三浦直美って言います。はじめまして。私はコロンブスに勤めているんですよ。」

ちよつと笑って話しかけました。

「えっ、じゃあ、取引先の人なんだ…。」

ちよつどそのとき、店員が注文をとりにやってきました。

「あ、私はブレンドコーヒーで。」

「僕はアメリカンで。ねえ、ここ、ケーキもあるけど、食べない？」

「私はコーヒーだけでいいですよ。」

直美は帰ってからDVDを見ながら一人でゆっくりケーキを食べたかったので断りました。

智史は何を思ったか上目遣いで、

「じゃあ、この中でどれが一番好き？」

直美に聞きました？

「そうですね。チーズケーキかな？」

「じゃあ、その次は？」

「シヨコラケーキかな？」答えながら直美は、

ここイチゴのシヨートケーキはないんだ。あれが一番好きなのにななどと思っていると智史は店員に

「チーズケーキとシヨコラケーキもお願いします。」

注文しました。

直美は、

あれっ、もしかしてこの人、甘党なのかな…

私も注文した方がよかったかな。店員さんも行っちゃったし、まあ、いいか。

と思って黙っていたら、智史が話しかけてきました。

「ところで三浦さんは、何で講習受けたの？」

「あ、私はボランティアしてるんで、その関係で…。」

「そうなんだ。すごいね。僕は会社に言われて来ただけなんだけどね。」

直美は無理矢理だけどねと思いながら、話しかけました。

「いえ、たまにですから。そういえば、そちらの会社は警備会社だから、必要なときもありますよね。」

「そうなんだよ。こういうの持ってた方がグレードが上がってくるから。」

「休みの日に大変ですね」

ちょうどそのとき、注文したコーヒーとケーキが運ばれてきました。

「三浦さん、食べて下さい」

と運ばれてきたケーキを直美の前に智史が差し出しました。

「えっ、一人で二つも食べられませんよ。」

「大丈夫だよ。僕が手伝うからから。」

と言いながらショコラケーキを食べはじめました。

直美は

この人、強引な人だなあ…。営業してるだけあるなあ。と思いながら、チーズケーキを食べはじめました。

「ねえ、聞いてもいいかな？三浦さんは何歳なの？」

「え、28歳ですけど…」

戸惑ったように直美が答えました。

「そうなんだ。僕はね、34歳なんだ。もうそろそろ、結婚したい

なと思ってるんだけど…」

上目遣いに直美に話しかけました。

直美は

まあ、そういうことと思う歳だよね

と思い、

「そういう歳ですからね。ところで山本さんは元気です？」
と聞きました。

山本さんはコロンブス担当の人です。

「ああ、元気だよ。

山本とは同期なんだよ。」

その日は取引先の人ということもあり、話しが弾んで直美は楽しい時間を過ごしました。

その日はお互いに携帯の番号を交換して別れました。

それから智史から何日かに一度の割合で電話がかかるようになり、直美もなんだかかけてもらうばかりでは悪いと思い、お互いに電話やメールをするようになり、潤いのない直美の生活が少し変わったようでした。

そして、休みの日には二人で食事に行くようになりました。

そんな付き合いの続いたある日、智史から電話がありました。

「あの、明日は初めて逢った所で待ち合わせしませんか？」

直美は思いもしないことを言われて、動揺して

「えっ、あの、初めて逢った所って、どこでしたっけ？」と答えました。

智史はため息をつきながら、続けました。

「覚えてないんですか？。。。ビルですよ。明日の14時にそこではどうですか？」

直美は思い出したらしく、

「ああ、そういえばそうでしたね。じゃあ、明日の14時ですね。お休みなさい」

と言って、電話を切りました。

その切れる直前、智史が小さな声で

「直美ちゃん、好きですよ。お休みなさい。」

と言いましたが、直美には聞こえていませんでした。

そして待ち合わせの時間となりました。

二人は近くのコーヒーショップに入りました。

それは初めて二人で入ったコーヒーショップでした。

二人はなにげない会話で盛り上がりました。

そしてふと会話が途切れたとき、智史が上目遣いで直美に尋ねました。

「あの、三浦さんは彼氏いるんですか？」

「いや、そんな、彼氏なんて、何年もいませんよ。」

直美は何ヶ月も一緒に食事をした気安さから笑いながら答えます。

「それは何か、あるんですか？こんなにかわいいのに…」

そうなのです。直美は実はちゃんと化粧してきちんとしたらかわいいのです。

彼氏がいけないのも家と会社の往復だからなのです。

それに気づかない直美は、

「いや、そんな、モテないだけですよ。」

と顔を赤らめながら答えます。

そのとき、直美は、いつだったか結婚した友人の恵子に言われたことを思い出しました。

「直美もさあ、家に閉じこもってばかりいないで、休みの日ぐらいどっか出かけたなら？」

そんなんじゃないつまでたつても彼氏も結婚も出来ないよ。」

「えー、そんなのめんどくさいよ。私、家にいる方が好きだからいいよ。」

いかにもめんどくさそうに直美が答えます。

「ちよつと、それでも年頃の女の子？」

彼氏が欲しいとか思わないわけ？」

呆れたように恵子が言います。

「いたらいいとは思っけどさあ…」

「じゃあ、さ、いい方法があるよ。」

「えっ、なにに、どんな方法？」

恵子がちよつと考えるながら言います。

「直美次第なんだけどね…。それは、本通りを直美がだるそうに歩くだけでいいよ。簡単でしょ？」

本通りは若い人向きのショッピング街です。いつも若い人たちであふれています。中には、そこでナンパする人やビラ配りをする人がいます。

「嫌よ、そんなの。ナンパを待つてみたいなこと…。」

「そんなこと言つてたらいつまでも彼氏出来ないよ。直美つて、よく見るとかわいいから2往復ぐらいしたら誰か声かけてくるよ。」

「そんなんで声かけた人になんかされたらどうするのよ。私、そんなに軽くないし…」

「それもひとつの出会いじゃない？それなら、合コンとかでも行つてみたら？」

もしかして、私、恵子も言つてたけど、かわいい？いや、いやいや、まさか…

智史は直美に彼氏がないことを聞いて嬉しそうに直美の手を握つてきました。

「じゃあ、三浦さんいや直美ちゃん、僕と付き合つて下さい。いい？」

と顔を近づけて直美に聞いてきました。

直美はドキドキしてきて、

「えっ、でも、私でいいの?」

と戸惑ったように答えます。

「直美ちゃんがいいんだ。初めてあつたときから好きだつた…。」

と熱い視線を直美に向けて告白しました。

これは本気なの…、

いや、まさか私に、

直美は何ヶ月も食事をしてきた人で実はずっと気になってきた人でしたがいまいち信じられず、思わず、

「冗談じゃなくて、本気ですか…」

と直美は智史に尋ねました。

「冗談なんかじゃないよ。僕、真剣だよ。直美ちゃんと付き合いた
いんだ。」

はつきりと直美に向かって言いました。

直美も智史といるとドキドキしてきて、なんだかとても気になる存在になっていたので、これは本気なんだと思うと私も決心しなきやと、ついに直美もコクリとうなづきました。

「私でよければお願いします」

と恥ずかしそうに答えました。

すると智史は満面の笑顔で、

「よかった〜！僕、断られたらどうしようかと思ったよ。幸せにするからね。」

と直美にまた熱い視線で伝えました。

直美はなんだかとても嬉しくなって、心の中で今日は人生最良の日だと思いました。

好きになってくれてありがとう、智史さん…。

（後書き）

いかがでしたでしょうか？

お気に入り登録して下さった方、ごめんなさい。一部変えました。読んで下さった方、ありがとうございます。 読

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6023o/>

ずっと好きだった

2011年9月21日10時57分発行